ほんわかエブリディ

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほんわかエブリディ

【Ｎコード】
Ｎ９７２６Ｎ

【作者名】
源雪風

【あらすじ】
かわいい後輩大塚くんと、源雪風のだべり。

（前書き）

以前投稿した、ほんわかエブリディを読みやすく一つにまとめました。

このお話は、思春期真っ盛りのかわいいチェリーボーイ大塚君と、その先輩の源雪風の会話を書きとめたものなのさ。暇つぶしにでも、まったり読んでくだせえ。

雪風「大塚君、何やってるの。」
大塚「ＰＳＰです。」
雪風「へぇー。モンハンじゃん。」
大塚「ところでＰＳＰって何の略か知ってますか。」
雪風「（知ってるけどあえて）何の略？」
大塚「ぷんすかぷんの略ですよ。」（にこにこ笑顔）
雪風「ちゃいまんがな。プレイステーションポータブルの略でしょ？」
大塚「えっ・・・・。」（固まる）
雪風「でも、ぷんすかぷんもいいねぇ。そっち採用。」
大塚「ＫＹみたいに、流行らせましょうよ。たとえば『俺マジＰＳＰなんですけど～。』とか。」
雪風「伝わりにくいなぁ。」（笑）
大塚「ＫＹだって、僕は今まで、貴様よく生きてるなの略だと思ってましたもん。略せばいいってもんじゃないよ。ＰＳＰだよもうっ！」
雪風「おっ！早速使ったね。じゃあ私もつられてＰＳＰ！」

雪風「あ、今日マンガ研究部がある日だ。」
大塚「まんけんって、何をするんですか。」
雪風「本を読んだり、漫画描いたり。」
大塚「ラジバンダリ～。」
雪風「ちょ、ナイスタイミング！そしてちょっとネタが古い！」

大塚「で、何の本を読むんですか。」（興味津津）
雪風「図書館で借りた本。」
大塚「えー。せっかくまんけんに行くんだから、他では読めない本を読んだ方だいいですよ。」（にこにこ）
雪風「え、たとえば？言ってみな。」
大塚「過去の部誌とか。まんけんにしか置いてないでしょ。」
雪風「くっ、そう来たか。」
大塚「えへへ。」（にこにこ）

雪風「大塚君、ワルキューレ発動ごっこしようよ。」
大塚「それ、どうやるんですか。」（首を傾げて）
雪風「『ワルキューレ発動！』って叫ぶ。」
大塚「それだけ？」
雪風「それだけ。」
大塚「僕のターン！ドロー！ワルキューレ発動！」
雪風「ちょっと違うけど、まあいいや。私のターン！ドロウ！こっちもワルキューレ発動！」
大塚「だめだめ～。ワルキューレは、先に出した方しか効かないんだよ。」
雪風「小学生の屁理屈みたい。くすくす。」
大塚「ところでワルキューレって何ですか。お酒？」
雪風「ワルキューレってのは、天から来た女戦士。地上の強い男をスカウトして、天国での戦争に使おうとしている。」
大塚「で、ワルキューレを発動したらどうなるの。」
雪風「ヒトラーが暗殺される。」
大塚「何だ。たくさんの美少女に囲まれてわさわさするんじゃないんですか。」（落胆）
雪風「わさわさ！？まぁそっちの方が大塚君は楽しいだろうね。」
雪風「朝からずっと頭が痛かったのに、部活の時間になったら治っ

ちゃった。」
大塚「拒否反応・・・ですか。」
雪風「かもね。さて、活動するか。」（笑顔）
大塚「今日は何をするんですか。」
雪風「まず、ねりけしで遊ぶ。」
大塚「出た！僕のライバル。」
雪風「英語の時間によく練っておいたから、よくのびるよー！！」
1メートルくらいのびる、ねりけし。
大塚「わー！すごい。さすが僕が認めた男。」
雪風「これ、男なんだ。ピンクでいい匂いだから女の子だと思ってた。」
大塚「ピンクでいい匂いのしょた系の男の子。キャラがかぶるんだよ。」（怒）
雪風「大丈夫。かぶってないから。第一、大塚くんのが練り消しより勝ってるよ。」
大塚「でも僕といる時より・・・・練り消しで遊んでる時のが楽しそうなんだもん。」（いじらしい眼つき）
雪風「じゃあ一緒に練り消しで遊ぼう！」
大塚「うん。」
練り消しをハサミで切り刻む大塚君。
雪風「ヤンデレか！」（ツッコミ口調）

大塚「僕、今からつんでれにチャレンジします。」
雪風「どれどれ！」
大塚「別にお腹空いてないんだからね。」
雪風「それは、やせ我慢。」
大塚「えっとえっと・・・。」
雪風「そのままの大塚君でいいじゃん。」
大塚「ふん！」
そっぽを向く大塚君。

雪風「どうしよう。」（慌）
大塚「・・・ありがとう。」（よそを向いたままで）
雪風「おっ！もしかしてツンデレ。」
大塚「今の何点くらい？」
雪風「８２点。」
大塚「やったぁ。平均点を大幅に上回ったぞ。」
雪風「平均点なんて、あるのか・・・。」

雪風「教育という名の軟禁。」
教室でぐったりする雪風。
大塚「でも、無知という名の罪も怖いですよ。」
雪風「誰かの小説で『俺は世界に軟禁されてる』って書いてあった。」
大塚「まぁ行動範囲が広いからいいんじゃないですか。気の毒なのは昔のゲームのキャラです。ハチャメチャなルールと８ビットの体。・・・涙が出てきませんか。」
雪風「厭だ。そんな人生。ラスボスに何度もやられたりするんだよね。」
大塚「ラスボスがめちゃくちゃ強くて、人生の厳しさはゲームで学びました。」（笑）
雪風「それは、ゲームの厳しさだから。」
大塚「強いラスボスが生まれるのは、意地悪な人間が考えたからです。あながちゲームだけの厳しさとは言い切れませんよ。」
雪風「くっ。なるほど。・・・負けました。」ＯＴＬ
大塚「さぁ涙を拭いて。」
雪風「な、泣いてないもん。」
大塚「ところで僕がラスボスだったらどうしますか。」
雪風「平和的解決に持ち込む。仲良くしようね。」
大塚「は、はい。」（照）

相撲をＴＶで見る大塚と雪風。
大塚「すもうって、えろいですね。」
頬を紅く染める大塚君。
雪風「い、いきなり何ぞや。」
大塚「だってお尻がかわいいですよ。」
雪風「わっ。本当だ。」
大塚「しかもぽよぽよした体が二つも。」
雪風「取っ組みあってる。」（苦笑）
大塚「まわしを掴んだときなんて、どきっとしませんか。」
雪風「ドキッ。」
大塚「電気代さえ払えば、外人のでも日本人でも、桃尻見放題ですよ。」
雪風「いかがわしい。その言い回しがとっても。」
大塚「僕は死に方が選べるとしたら、おすもうさんの下敷きになって死にたいです。」
雪風「どうして？」
大塚「冷たいベッドで死ぬより、最期ぐらい人肌のぬくもりで死にたいから。」

雪風は、アクエリオンのオープニング曲のＣＤを聞いている。
大塚「初めてアクエリオンのＣＭを見た時、すごくびっくりしました。だって『気持ちいいー！』ですよ。」
雪風「また下ネタかい。まぁ、あのＣＭには驚いたけど。ＢＧＭの『一万年と二千年前から愛してる～。』のインパクトもすごかった。」
大塚「あのＣＭを見るたびにドキドキしたのを、よく覚えています。」
雪風「ＣＭの雰囲気が全体的にいかがわしいもんね。でもアクエリオンのストーリーは神話風で真面目だから安心して。」
大塚「え～。残念。」

雪風「でも、アクエリオンに乗ると気持ち良くなって叫びたくなるらしいよ。」
大塚「じゃあ僕、乗ってみたい。乗って『気持ちいいー！』って叫ぶ！」
雪風「私はエヴァンゲリオンに乗りたいな。」
大塚「エヴァンゲリオンは暴走するから、危ないですよ。」
雪風「じゃあアクエリオンでいいや。」（笑）
大塚「ところで、アクエリアスを飲んで、アクエリオンを当てようキャンペーンなんてどうですか。」
雪風「当たっても置き場所ないぞ。」
大塚「パジェロが当たったけど、免許と駐車スペースが無いから持てあます人みたいですね。」

雪風「この前ＢＯＯＫＯＦＦでアクエリオンの小説版を買っておけばよかったなぁ。でもまた川越行くのは遠いし・・・。」
大塚「世界は広い。またいつかどこかで巡り合えますよ。」
雪風「広いと、巡り合いにくいじゃん。」
大塚「あ、そっか。じゃあ日本は狭いから、また巡り合えますよ。」
雪風「世界は広いのに、日本は狭いんだね。とすると、日本でない世界がごっそりあるんだね。」
大塚「『世界は広い』の世界って、国々のことでしょうか。それとも個人的な世界のことでしょうか。」
雪風「大塚君はたまに難しいことを言うよね。とりあえず、世界を辞書で引いてみよう。えっと、？国々？個人の生活の場・・・大体大塚君の言ったことだね。」
大塚「結局どっちなんだろう。」
雪風「日本語って難しいね。」
大塚「久しぶりにまともな話をしましたね。僕ら。」
雪風「私たちの世界が少しまともになったね。」

大塚「僕には大きい夢があります！」
雪風「え？なになに～。」
大塚「僕だけの大奥を作りたいです。」
雪風「おっきくでたねぇ。」（笑）
大塚「様々なタイプの女の子を、日本各地からスカウトして、毎晩ウハウハします。夜伽を申しつける。なーんてね。」
雪風「でも大奥って、女の争いがすごいよ。うまくコントロールできる？」
大塚「それは考えてなかった。どうしようかな。」（悩）
雪風「一人に入れこんだりせず、みんなと順番に夜伽をすれば、少しは何とかなるかも。」
大塚「大変ですね。」
雪風「欲張りすると、後で報いを受けるよ。」
大塚「どうせ死ぬなら、打ち上げ花火のように一花咲かせたいんです。」
雪風「若いねー。」（遠い目）
大塚「僕と大して年齢が変わらないのに、今からそんなこと言ってどうするんですか。もっと野望を持たないと。」
雪風「野望の末が大奥ですか。」（笑）
大塚「そんなもんでしょう。」（笑）

雪風「♪デカ　デカ　デカ　デカレンジャー♪。」
大塚「わっ、なつかしいですね。いいなぁ刑事。なってみたいなぁ。」
雪風「なったら、どんな働きをするの。」
大塚「ストーカーのストーカーをします。刑事なら追跡調査ってことに出来ますから。」（笑）
雪風「そんなことに刑事の力を使わないで。裏で税金泥棒って言われるよ。」
大塚「大丈夫です。きちんとストーカーを現行犯タイホしますから。

」
雪風「他には何する？」
大塚「被害者の女性の相談に乗って、恋に発展させる！」
雪風「うわ、したたかだ。ふられた女の相談に乗って、恋仲になる男子みたいだ。」
大塚「あ、それならやったことがあります。」
雪風「で、どうだった？」
大塚「女がふられた理由がよく分かりました。その女の人ひどくわがままな人でしたよ。」
疲れたように嘆く大塚君。
雪風「刑事より、ホストやってみたら。沢山の女の人と恋仲になれるよ。」
大塚「嫌ですよ。一人に愛されればそれで十分ですから。・・・・嘘。」（笑）

雪風「大きな小屋って、矛盾してるよね。」
大塚「今、僕を見て、小さな大塚も矛盾してるって思ったでしょ。」
雪風「思ってないよ。ところで、大池さんって名前の人がいたけど、大きな池って湖じゃない？」
大塚「池って大きな水たまりですね。」
雪風「確かに。水の量によって名前が変わると思う。地に落ちた涙→こぼした水→水たまり→池・沼・泉→湖→海てね。」
大塚「池と沼と泉については、綺麗な順に言うと、泉、池沼、沼だと思います。それにしても、ランク付けに、地に落ちた涙がある辺りが、ロマンチストですね。」
雪風「池、沼、泉にネッシーはいない。湖だけに、そういうのがいる。湖より海の方が広いからいそうだけど、どう思う？」
大塚「海にいたとしても、海底の奥深くに住んでいるから、見つかりません。しかし湖は浅いから、うっかりすると首が水面にはみ出してしまうんですよ。」

力説する大塚君。
雪風「私は客寄せだと思うな。例えば、日本海で海獣が現れても、日本海のどこかあやふやじゃん。困っちゃう。それに比べ湖なら生息範囲が限られているから、静かな湖畔の森の陰でずっと待ってればいいでしょ。そうすると待ち人のご飯代で、湖の周りのお店が儲かるじゃん。ただの嘘だよ。」
大塚「でも、でも～。」
反論を考える大塚君。
雪風「そういえば最近、ネッシーの話題でないね。」
大塚「ネッシーやすく冷めやすいんですよ。」
雪風「よっ！座布団一枚。」
大塚「ともかく、ネッシーはいます！」
雪風「もしかしてＵＦＯとか幽霊も信じてるの。」
大塚「ＵＦＯと幽霊は、実在して欲しくないので信じません。でも、ネッシーは優しいし、怖くないから信じます。」
雪風「ネッシーを熱心に信じている辺り、大塚君はムーを読んでそうだ。」
大塚「昔は読んでましたよ。」
雪風「ところで、あの雑誌何でムーってタイトルなの。」
知っているのに聞く雪風。
大塚「むーって考えながら書いたから。」
雪風「ムー大陸から取ってんじゃん？」
大塚「むー。」

大塚「僕、ホストの練習がしたいです。先輩、お客さん役やってください。」
雪風「コントの導入みたいだ・・・。ま、ともかくやってみっぺ。♪カランコロンカラン♪（入店時の音）」
色目を使う大塚。
大塚「いらっしゃいませ～。さぁさぁ、こちらへどうぞ～。」

雪風を席へ導く動作をする大塚。
席に座る動作をする雪風。
雪風「じゃあまず、流れ星（カクテルの名前）をもらおうか。」
雪風の肩に腕を回す大塚。
大塚「えー。もっと酔いたいなぁ。ボトル開けようよ。ねっ。」
上目づかいで雪風を見る大塚。
雪風「じゃ、恵比寿麦酒一つ。」
大塚「僕はえびすじゃ酔いませんよ。（口をとがらせて）もっと美味しいのがいいな。（手を握って見つめる）ね、いいでしょ？（雪風の目を真っすぐ見る）」
雪風「じゃあポンジュースね。」（笑）
大塚「もうっ。いけずぅ。（えびす一気飲み）・・・どうですか。僕のホストっぷりは。」
雪風「♪可愛い顔してあの子割とやるもんだねと♪って感じ。」
大塚「よっしゃ。」
ガッツポーズする大塚。

雪風「空母って、字づらが好き。」
大塚「空君の母も空母ですね。」
雪風「空母は船なんだよ。体の中にたくさん飛行機を乗っけてて、まっ平らな背中からばびゅんって飛ばすの。」
大塚「子供を空に放ってる。」（笑）
雪風「可愛い子には旅をさせろってヤツですよぉ。」
大塚「母なる海の上に空の母である空母が浮かんでるね。海は姑だ。」（笑）
雪風「船は鉄製だから空母はかたぶつなの。海は大らかな放任主義だけど、怒らすと大変よ。」
大塚「海の支配下に沢山の海の幸までいるよ。」
雪風「海は社長か極妻でせうか。」
大塚「海の夫は山。しかも活火山。・・・てことは極妻でしょうね。

」
雪風「空母、苦労するなぁ・・・。」（笑）
大塚「僕は、とっても実用的なプロポーズの言葉を考えました。言ってみるので、採点してください。」
雪風「わーったよ。言ってみい。」
大塚「あなたに僕を差し上げますから、僕にあなたを下さい。」
雪風「むむむぅ。それじゃ人がモノみたい。でも、一生懸命さは伝わる。」
大塚「で、何点ですか。」
雪風「私には、君に点数をつけることなんてできないよ。頑張ってやってれば、それでいいじゃないか。」
しみじみと大塚君を諭す雪風。
うるうるした目になる大塚君。
大塚「そうですよね。点数をもらうより、心の底から誉められる方がうれしいです。」
雪風「それにしても、さっきのプロポーズ、昭和の香りがするね。本からパクったの？」
大塚「いいえ。自分の脳みそで、現代の結婚制度を簡単にまとめてみました。」
雪風「いきなりハードでシリアスな話になったなぁ。」（苦笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9726n/

ほんわかエブリディ

2010年10月9日15時28分発行